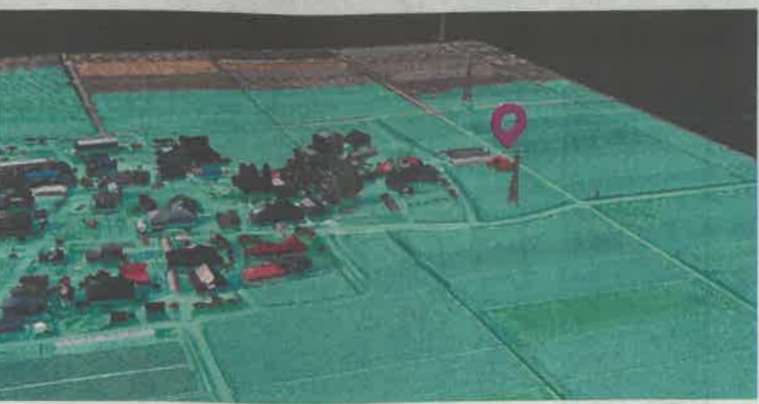


Your Virtual House



Water Depth
1.04m
Current Time
AM06:01



AIベンチャー アリスマー

浸水予測システム開発

センチ単位 短時間で算出

鳴門市出身の大田佳宏氏が社長を務める人工知能（AI）関連のベンチャー「A R i s m a r」（アリスマー、東京）が、高精細な3次元地図とAIを使って出水時の家屋などの浸水状況を予測するシステムを開発し、自治体や損害保険会社から注目されている。建物ごとに、センチメートル単位の浸水高を短時間でシミュレーションできるのが特長。7月に熊本県人吉市で起きた球磨川の氾濫では、家屋の損害を判定するのに効果を発揮した。

システムは、まず対象地コンピュータ上に製作。A域で小型無人機ドローンをIが地形の特徴から、地図飛ばし、上空から高精度レ上で川の決壊などによるウォーターを使って地形データの流れを予測する。Iを取得する。これを基にA通常のハザードマップはIが、道端の石ころ一つで完成まで数カ月から数年かも再現できる、センチメーかる。一方、アリスマーのトル単位の3次元地図をコシステムは膨大なデータを

短時間で処理できる「高速アルゴリズム」を駆使することで、センチメートル単位の浸水予測を1時間以内に算出できる。

初めて実用化されたのが球磨川氾濫での損害保険の判定だ。被災地数カ所の浸水高を実際に測り、3次元地図に落とし込んで地域の浸水高を推計。三井住友海上火災、あいおいニッセイ同和損保の両社がそれぞれ約200戸の被害状況を3次元地図上で調査し、各10戸を全損とした。アリスマーは「判定作業がスムーズに進めば、速やかな保険金の支払いにつな

自治体や損保 導入で注目

「がる」と強調する。自治体の活用も進みつつある。東日本大震災で津波被害を受けた福島県広野町が6月、災害に強い街づくりを進めるためアリスマーと協定を結び、浸水予測システムの導入を決めた。

システムは防災対策や街づくりのほか、罹災証明書発行、救助活動などに役立つと期待される。3次元地図は浸水以外に、地震の被害予測や農業用トラクターの自動運転などへの応用も考えられる。このため、北海道から九州までの10カ所程度の自治体が導入を検討しているという。

大田社長は「災害対策のモデルとして海外への展開も視野に入れている。社会的な課題の解決を進めながら、ビジネスとしても拡大していければいい」と話している。

（久保高茂）